

枯葉剤犠牲者のための支援施設 ——「ベトナム友好村」の支援活動と交流

阿原成光 所員・経済経営学部教授

1. はじめに—「ベトナム友好村」との衝撃的出会い

2002年8月、何の前触れもなしに「人類の平和と子どもたちの幸福のためにもっとも貴重な場所」に出会ってしまった。

2002新英語教育研究会ベトナムツアーで、ホーチミン、メコンデルタ、フエ、ホイアン、ソンミを経て、クアンガイで「ベトナムのダーちゃん」と会った後だった。ハノイでホーチミン廟、革命博物館をみてから、気軽な気持ちで、枯葉剤犠牲児救済の施設を見学に出かけた。うかつにも、とんでもないところに出会ってしまった。だが、一生の宝物になると思った。

ハノイの市街地から出て「ベトナム友好村」に着くまでが妙に不思議なことばかりだった。ハノイの街並みが消えるころから、一点俄かにかき曇り、すごい土砂降りになった。ガイドのホーさんが、不思議に道に迷った。大きなバスは道路の十字路の真ん中で、2回も180度の方向転換をした。「ベトナム友好村」に着くと、いっぺんに雲は晴れて、太陽が正門の真っ赤な横断幕を照り付けていた。天までが、運命的な出会いを演出していた。

「ベトナム友好村」の門を入ると、正面に、ベトナム、フランス、ドイツ、アメリカ、日本の5カ国の旗が立っていた。説明は各国語で書かれ、日本語では次のようにあった。

「この村は、アメリカの退役軍人ジョージ・マイゾー（George Mizo）氏の提案のもとにヴェトナム、フランス、ドイツ、日本、アメリカの退役軍人、慈善家の援助で建設されました。この村は、平和、友好、和解の象徴です。」

化学毒薬ダイオキシンの枯葉剤で苦しむ元兵士と子どもたちの再生の場、生きることを保障する場であった。元ベトナム解放軍軍人のファン所長の淡々とした話に釘付けになった。約1時間の話とビデオの説明で事の重大性はわかった。その後、子どもたちと出会って、地面が揺れた。眼が大きく飛び出しているような女の子ロンちゃんと、15歳なのに身長80センチのロアンちゃんと会ってからは、涙が止まらなかった。



写真1 ベトナム友好村の子どもたちと一緒に

この写真撮影のときに、ロアンちゃんを右腕で抱え上げると、ロンちゃんは左手をしっかりと握っていた。ほんの短い間に深い心のつながりができたようだった。背の低いロアンちゃんをひとりで歩かせようとせずに、背の高い子達がかばっていた。やさしい仲間た

ちだった。別れ際に、あわてて用意した献金をフン所長に渡したときにも、涙が溢れて、声がつまった。フィンランドから贈られたという縫製ミシンを見てきたので、「私たちにできることは何か」を訊いた。フン所長は「コンピューター室を造りたい」という。日本の出番かもしれない、と思った。帰りのバスの中、ずっと涙が止まらなかった。次の日のハロン湾行きをやめて、またもう1日ベトナム友好村にいたい、と思ったが、「団長」の想いで、気持ちを整えた。本当に、全身を揺さぶられる、衝撃の出会いであった。一生の付き合いだと、心に決めていた。

こんな出会いをしてから帰国して、出かける前にいろいろと相談にのってもらっていた木谷八土さん（元ベトナム在留記者・現日本ベトナム友好協会東京都連合会会長）とすぐに会った。ベトナム友好村の話をし、ベトナム友好村日本委員会のある「不戦兵士・市民の会」の担当責任者山内武夫さんのことを訊くと、知っていて、石神井公園駅で待ち合わせて一緒にお家を訪問した。山内さんは高齢とご病気でつらそうであった。木谷さんと一緒に、お役に立ちたい、と伝えた。

翌2003年のベトナムツアーは、新英語教育研究会と日本ベトナム友好協会東京都連合会との共催で行い、はじめから「ベトナム友好村」訪問を日程に入れた。

一緒に写真を撮った子供たちとまた会うことができた。身長80センチのロアンちゃん、目の大きなロンちゃん、大きな頭のルンくん、笑顔のかわいいランちゃん。みんな元気だった。うれしかった。

ロアンちゃんからきれいな刺繍をプレゼントされた。ツアーで同行した若

者たちが歌をプレゼントしたお礼にと、子供たちも元気な声で歌ってくれた。聞いていて、たまらなくなり、外に出た。歯をくいしばってこみあげるものを耐えていると、所長さんにやさしくうながされた。なんで、こんなにも、いま、子供たちが労苦を耐えていなければならないのか。怒りを熱い青空にぶちあてていた。

病棟に入って、びっくりした。子どもたちの姿は、私の脳裏に焼き付いていた重症の胎児性水俣病患者の姿と重なった。立てない、座れない、歩けない、読めない、歌えない。みんなが来てくれたのがうれしいのだと、短い腕を組み合わせるように振っていた。また、たまらなくなっていた。なんでだ。どうしてだ。ちょうど居合わせたルンくんの笑顔に救われた。私もにっこりと笑顔を返した。

「ベトナム戦争は断じて終わっていない」この子供たちに明るい笑顔が保障され、アメリカ政府がその責任をとり、謝罪し、補償することがないかぎり、ベトナム戦争を終わらせてはならない。心からそう思った。

2．わが青春時代に特別な意味を持っている「ベトナム戦争」

1960年代に生きた青年にとって、「ベトナム戦争」は特別であった。私も同じだが、特別であった。27歳のころ、生きるのがいやになり、人間嫌いになったことがあった。

東京学芸大学で学生運動、全教ゼミなどに取り組んで、勤評闘争のしこりが色濃く漂う荒川区の教育現場に、1960年安保闘争の年に、飛び込んだ。新卒で採用された仲間が8人いたが、毎月話し合いを池袋の喫茶店でもって、7人が組合に加入した。その後、学力テスト闘争、脱脂粉乳闘争などなど、矢継ぎ早の戦いが続き、挫折もあり、人間関係に疲れきっていたのかもしれない。

そんな時に、妙に気になりだしたことがあった。新聞の国際面に小さく出ている「ベトコン」である。その記事がだんだんに大きくなってくると見ていると、なんだか元気と勇気がでてきた。ベトナム反戦の集会では、大声で「アメリカはベトナムから出て行け！」と叫んでいた。ベトナム人民と一緒に、アメリカ帝国主義と戦っていた。当時の平和を愛する若者たちの共通の感情だったと思う。

どんどん元気になって、教員組合運動、教育研究運動に精を出し、東京都知事の選挙にもがんばった。1968年には新英語教育研究会東京支部を結成し、翌年からは全国の事務局長、財政部長、組織部長を兼任し、全国に支部が結

成される度に、日本地図に旗を立てて喜んだ。組織がきちんとしていなかったのも、中央常任委員会の月例定例化から取り組み、しんどかったが、いまは、月刊誌を出せるようにまでなっている。

言ってみれば、「ベトコン」は、青春時代の挫折克服の恩人であった。

1975年4月30日午前11時サイゴンの大統領府に解放軍の戦車が突入し、屋上にベトナム国旗がひるがえった。蟻が象を倒したように、ベトナム人民はアメリカを打ち負かした。ベトナム人民は本当に厳しい戦いを、「自由と独立ほど尊いものはない」というホーチミン主席の言葉を旗印に戦い抜いた。勇気と知恵をふりしぼって、ベトナム戦争を打ち勝った。

今年はちょうどベトナム全土解放30年目、ベトナム独立60周年の記念すべき特別な年である。このサイゴン無血解放の影に、その直前の4月25日に任命されたサイゴン軍司令官、サイゴン市警察長官たちの苦労があった。その2人のはじめの命令は、「解放軍に発砲するな、発電所、橋を確保せよ」であったという。その2人が、隠れ「ベトコン」であった、と木谷八土さんから聞かされたときの感動はいまでも忘れられない。

ベトナム戦争は、フランス、アメリカという大国を、アジアの小国ベトナムが、知恵と勇気で打ち破った、20世紀でもっとも価値ある歴史上の事実である。民族の独立という悲願を勇気と信念で勝ち取った、正義と平和の金字塔であった。この民族独立の正義の戦争を世界の若者が支援し、共に戦った。アメリカでは、キング牧師をはじめとして、戦っていたし、日本でも若者が、ベトナム人民と一緒に戦っていた。

だから、わが長男が生まれた年1975年のメーデーへ向かう山手線で、サイゴン解放の記事を読みながら、涙が止まらなかった。メーデー会場では、みんなうれしそうだった。

それから25年経った、21世紀のはじめの2001年に、第1回新英研ベトナムツアーでベトナムを初めて訪ねたときは、見るもの聞くものすべてが感動であった。ホーチミン市で、空港から一歩ベトナムの地を踏んだとき、感動が身体中を渦巻いた。町に出て、道路いっぱいになるオートバイのエネルギーに圧倒された。クチのトンネルを見て、ベトナム人民の知恵と勇気に頭が下がった。ベトナム航空国内線の機内で、健気に働くアオザイ姿に「がんばってるね」とホーおじさんの気分になっていた。矛盾や混乱も、新しい自らの国づくりのひとつの過程として許せて、すべてが感動だった。勢いよく前進するベトナムと心優しいベトナム人が大好きになった。

ベトナムは私の第2のふるさとになった。

3．化学毒薬ダイオキシンの枯葉剤を撒きに撒いた アメリカの戦争犯罪

アメリカは、ジョンソン大統領が北爆を開始したときに言ったように「ベトナムを石器時代に逆戻りさせ」て、戦争にすぐに勝つと思っていた。世界に冠たる武器兵器の質と量に物を言わせて、簡単にねじ伏せるつもりだった。ところが、ベトナム人民は、知恵と勇気で、ゲリラ戦を戦い、アメリカを追い詰めていった。アメリカは、きわめて非人道的な戦術をいくつも使い始めた。その最たるものは、「ベトナムのダーちゃん」や「ソンミ村虐殺」のような民間人の大量無差別殺戮である。もうひとつが、ダイオキシンの含む枯葉剤の大量散布である。

枯葉剤をずっと取材している写真家中村梧郎さんの著書『母は枯葉剤を浴びた—ダイオキシンの傷あと』（新潮文庫）から引用しよう。

「米空軍によるベトナムでの枯葉作戦は、1961年に始まった。

ベトナムのジャングルや田畑に航空機から化学薬品を浴びせかけ、解放勢力の食料源と拠点を壊滅させるのがその狙いとされていた。

作戦は10年余りの間、休みなくつづき、1971年に終わった。

ベトナムの広大な原生林は枯れ、動植物も死に絶えた。土壌中の微生物さえ姿を消して土が死んだ。そして地上は砂漠化した。」

「枯葉作戦は1961年8月の実験散布にはじまって10年間続いた。散布薬液総量は9万1,000トン。散布面積は240万ヘクタールを越す。その結果、南ベトナムの耕地全体の5%以上と森林の12%、海辺のマングローブ樹林の40%以上が枯れ死した。関東全域に匹敵するほどの地表に、くまなく“毒薬”を浴びせたことを示す数字である。

作戦をすすめる米空軍が用いていた暗号コールサインは、地獄を意味する“ヘイデイズ”であった。まさに、ベトナムの地上に、文字通りの地獄を現出させるものであった。」

同じく写真家の大石芳野さんは、著書『あの日、ベトナムに枯葉剤がふった—戦争の傷あとを見つめつづけた真実の記録』（くもん出版）で次のように述べている。

「戦争中に、このマダーの森でゲリラ兵としてたたかっていたフンさん

は、こう話していました。

“爆弾にあたれば命がありません。あたらなければ生きています。けれど、枯葉剤などの化学兵器は、体を、じわじわとおかしていきます。そして、毒をあびた本人ばかりか、その子どもたちにまで、害をおよぼしています。いま、それはわたしたちにとって、たいへん深刻な問題になってきています。

アメリカ軍は、枯葉剤を、よく晴れた風のない日の朝にまきました。あらかじめ森を爆撃しておいて、そのあと3機くらいの輸送機で低空飛行をしながら、枯葉剤の液をまいたのです。そのあとでナパーム弾をおとし、森をいちめん火の海にもしました。枯葉剤の毒性が熱によってますことを、アメリカ軍は知っていたからです。”

このダイオキシンを含む枯葉剤の有毒性を十分知っていたアメリカ政府とアメリカ軍は責任逃れの姑息な行動をとっていたことが、『ベトナム戦争におけるエージェントオレンジ・歴史と影響』レ・カオ・ダイ著 尾崎望監訳（文理閣・2004年8月刊）（*Agent Orange in the Viet Nam War: History and Consequences*, Le Gao Dai）にはこう書かれている。

「1961年11月30日アメリカ大統領ケネディは、南ベトナムの戦場で枯葉剤を使う計画を正式に承認したが、ホワイトハウスがベトナム戦争での枯葉剤の使用を公的に認めたのは、4年後の1965年9月20日になってからである。（中略）

当初アメリカ政府は戦時の枯葉剤の使用の責任を避けるために、散布を実行したのはアメリカ機であったにもかかわらず機体はサイゴン政権の旗で描かれ、パイロットは非戦闘員のユニフォームを着用するように指示されていた。アメリカ政府は枯葉剤使用の責任をゴ・ジン・ジェム南ベトナム大統領に負わせることを望み、これらの化学物質は人体に一切害を及ぼさないとジェム大統領が宣言するように求めた。」

この毒性枯葉剤のベトナムでの使用は、アメリカを含む世界中の多くの良心的な科学者の反対にあったことを、この本は次のように述べている。

「1966年6月15日、アメリカ科学振興協会（AAAS）の定期総会において、科学者たちからはベトナムでペンタゴンが使用した化学物質による有害作

用についての懸念が報告された。そしてベトナムの生態系に及ぼす影響を調査するために AAAS の太平洋支部の中に科学者グループが作られ、その結果は翌年のこの集会で報告されることになった。同年エール大学の生物学教室教授アーサー・ガルストンはアメリカ植物学会とともにジョンソン大統領に手紙を送り、ベトナムでの枯葉剤使用に抗議した。1967年2月、ハーバード大学教授ジョン・エドソールの指導のもとに、17人のノーベル賞受賞者と129人の AAAS メンバーを含む5,000人のアメリカ人科学者は、ベトナムでの枯葉剤使用を即座に終結させることを求めた決議文に署名し、ジョンソン大統領につきつけた。(後略)」

このような世論に抗しきれず、アメリカはベトナムでの枯葉剤の使用を終結せざるを得なかった。

この本は最近和訳されて出版されたが、この著者レ・カオ・ダイ教授は「ベトナムにおける化学戦争の被害調査国内委員会」に関わった科学者で、たいへん専門的な分析に満ちている。これを、「ベトナムの枯葉剤被害を調査し、障害者の医療とリハビリテーションを支援する会」代表の尾崎望さんが和訳されたものである。たいへん有益である。ただ、被害者の全体的な数字は出ておらず、これからの調査になるのであろう。

この枯葉剤作戦は、当初に日本への作戦として考えられていたという。中村梧郎さんの著書「戦場の枯葉剤—ベトナム・アメリカ・韓国—」(岩波書店)で次のように述べられている。

「そもそも枯葉剤は、第2次世界大戦の終戦間際に日本に散布する予定で準備されていたものだった。アメリカ現代史の権威、スタンフォード大学 B. J. バーンスタイン教授によれば、1945年5月に米陸軍に提出された計画は、東京や横浜、大阪、名古屋、京都、神戸周辺の稲作地帯にチオシアン酸アンモニウムを B - 29 から投下し、穀物を全滅させようとする内容だった。

(中略) 対日枯葉作戦の詳細な計画の報告書が米陸軍航空隊副司令官エーカー中將に届いたのは、長崎に原爆が落とされた翌日の8月10日のことであった。このときにはもう日本の降伏が時間の問題だったために作戦は実行されることはなかった。日本はかろうじて散布を免れたのであった。」

21世紀に引き継がれた人類が作り出した2大害毒、放射性物質と枯葉剤は

まさに日本を終戦に追い込むために用意されていたのであった。ベトナムの枯葉剤の犠牲は、他人事ではなく、まさにわれわれの問題であった。

学生時代からずっと原水爆禁止運動に関わり、とくに1985年にエリノア・コアさん（*Sadako and the Thousand Paper Cranes* の著者）に会ってから、「サダコ」にこだわって活動してきたものとして、不思議な因縁を感じている。

4. 「ベトナム友好村」の由来と国際的な支援組織

まさに運命的な出会いをしてしまった「ベトナム友好村」であるが、そもそもの由来を、はじめからかかわっていたベトナム友好村日本委員会・元担当責任者であった山内武夫さんの文書「「ベトナム友好村」(Vietnam Friendship Village) プロジェクトについて」(2002年9月12日付)で紹介したい。

「ベトナム友好村・国際的事業の目的と経緯

これを提唱したのは、米国のベトナム戦争帰還兵の中の少数の人たちで、その代表的人物の1人がジョージ・マイゾー氏(George Mizo)です。彼は、米国がこの戦争でベトナム国民に与えた莫大な被害と測り知れない不幸に思い至り、少しでもその償いをする、そしてそれを将来米国民とベトナム国民との平和と友好のために役立たせることを考えました。

しかし同時に、これは米国民だけの問題でなく、19世紀後半以来ベトナムを植民地支配下に置き第2次世界大戦後もその支配にしがみつこうとしたフランス、第2次世界大戦中にフランスに代わってベトナムを占領支配し、過酷な食料略奪などの政策で200万人ともいわれる住民の餓死を発生させた日本、さらに米国のベトナム戦争に協力あるいは戦争特需で利益をえた英国、日本、ドイツも深くベトナムに関わっていることから、マイゾー氏たちはこれらの国々の有志にも訴え、協力を求めました。

その結果、1992年春、米、仏、独、英、日の平和志向の元兵士の団体などの代表がパリに集まり、「ベトナム友好村プロジェクト国際委員会」を結成し、国別委員会を設けて、このプロジェクトの宣伝と建設費の募金活動を展開することになりました。

日本委員会は「不戦兵士の会」(現在「不戦兵士・市民の会」)がその事務局団体を務めることになり、同年8月から募金活動に入りました。

各国委員会の活動に先立ち、ベトナム政府は、マイゾー氏と各国支援者の真摯な意図を汲みとり、「ベトナム友好村」用地を首都ハノイ西部の農村に指定し、「友好村」の建設とその後の運営に当たる団体として「ベトナム

退役軍人協会」(Veterans Association of Vietnam)を指名しました。同協会は、以後国際委員会会長マイゾー氏(氏は枯葉剤被害者で、心臓疾患のために2002年3月18日に死去し、後任は夫人のローズマリーさんが引きづっています)同夫人ローズマリーさん(ドイツ委員会会長)および各国委員会と連絡をとり、その募金活動の成果に依拠しつつ、精力的に「友好村」の建設を進め、1998年に「開村式」に漕ぎつけました。

各国委員会の努力

「ドイツ委員会」国際委員会会長ジョージ・マイゾー氏は、このプロジェクトを提唱するに先立ち、ドイツで活動している「国際平和村」(Friedendorf)(世界中の地域戦争・大小の戦争で重傷を負ったり、孤児となったり、ひどい「トラウマ・精神的外傷」に悩まされたりしている子どもたちを特別に収容して、治療とリハビリを行い、故国に戻って社会参加ができるように支援活動をしている国際的団体)のスタッフとして働いていました。彼はこの仕事の中で結ばれた夫人のローズマリー・ヘーン・マイゾーさん(Rosemarie Höhn-Mizo)と共に「ドイツ委員会」運動を強力に推進しました。多年にわたる「国際平和村」の実績がドイツ政府の信頼を得ていることから、「ベトナム友好村」にたいしても多額の政府補助金(「子どもの家」数棟と診療所の建設費用)を獲得することに成功しました。

「フランス委員会」は元兵士の団体{共和国元兵士・戦争犠牲者の会}(A.R.A.C)が事務局団体になっております。「友好村」国際委員会結成の際にベトナムとの連絡や会議開催の便宜を提供し、「ベトナムツアー」を組んで運動の宣伝をし、最近ではフランス政府の「友好村」支援の資金援助(子どもたちの教育施設建設など)を取りつけることに成功しました。

「アメリカ委員会」は平和志向の元兵士たちで、中心はベトナム戦争帰還兵です。最近では活発な活動を展開しています。(中略)

「日本委員会」の事務局を務める「不戦兵士・市民の会」は会員のおおくが「15年戦争」あるいは「アジア太平洋戦争」(1931年～1945)の従軍者で占められており、あの戦争を日本の中国・アジア侵略戦争と認識して、2度と政府にこの愚を繰り返させないよう戦争を語り継ぐと同時に、戦後の「平和・民主・人権」の憲法を擁護する立場に立って協働を誓う男女・世代を越えた人々を会員にしたいと願う団体です。「ベトナム友好村」運動への参加は当会の重要な事業の1つであり、1992年以来いくつかの全国紙を通じて募金を訴え、各国の中でもドイツ委員会に次ぐ募金成果をあげ、18,300,000円の浄財を集め、米ドルにして15万余ドルをベトナム側に渡す

ことができました。しかし、昨今は当会会員の高齢化などに伴う会活動の減速や、国内世論の複雑な変化の影響の下で、新聞メディアにたよる募金活動が困難となり、きわめて不満足な状態に陥っており、新たな対応を迫られています。」

5. 「ベトナム友好村新日本委員会」の結成と国際委員会への出席

「ベトナム友好村日本委員会」が立ちゆかなくなっているとの話を聞くうちに、これは「誰かがやらなければならない、いま大事なこと」として迫ってきた。「不戦兵士・市民の会」の理事会では引き続き引き受けることができないために、日本ベトナム友好協会東京都連合会（以下、都連という）にぜひ引き受けて欲しい、という要請が組織として正式にあり、検討して、受けることになった。

「ハノイ平和村」支援を精力的に進めている松本まさ子は、2003年のツアーで一緒に、ともに、2004年から「都連」の副会長になった。「平和村」はドイツの「国際平和村」とドイツ政府の援助でベトナムに7つ建設され、これからも増える計画がある。「ハノイ平和村」は1992年に開設され、古い建物を使っている。所長さんは女医さんで、枯葉剤犠牲の子どもたちの医療と教育のための組織である。

「ハノイ平和村」と「友好村」の両方を支援するための委員会が、「都連」の中に「ベトナム平和・友好村支援新日本委員会」として作られた。私は「ベトナム友好村」の責任者となり、「枯葉剤被災児の自立のために「ベトナム友好村」の子どもたちにパソコンを贈る募金」をはじめた。募金のリーフレットの表紙には、ベトナム戦争で苦しむ子どもたちに熱い想いを寄せて名作『戦火のなかの子どもたち』を創った岩崎ひろのポスターを使いたくて、ひろ美術館の松本ゆり子副館長を木谷さんと訪ねて、了承していただいた。

2004年10月29、30日ベトナム友好村国際委員会第10回総会が開かれ、新日本委員会の代表として参加し、共同宣言、議定書に調印をした。はじめての国際会議であり、緊張したが、日本からのパソコンを贈る取り組みは、大きな感動と期待を各国代表から寄せられた。

会議は共同宣言と議定書に代表が署名して閉幕したが、共同宣言だけを紹介したい。

枯葉剤被害者を支援するベトナム友好村国際委員会共同宣言

今日、2004年10月30日、ベトナム社会主義共和国ハノイにおいて私たちは、
ローズマリ・ヘーン・マイゾー、ベトナム友好村国際委員会委員長、ドイツ委員会
代表
ジョルジュ・ドゥサン、ベトナム友好村国際委員会副委員長、フランス委員会代表、
フランス退役軍人協会代表
ベッキー・ルーニング、ベトナム友好村アメリカ委員会代表
阿原成光、ベトナム友好村新日本委員会代表
ミシェル・メイゾン、ベトナム友好村カナダ委員会代表
チャン・ハイン、ベトナム退役軍人協会副会長、事務局長、ベトナム代表

第十回ベトナム友好村国際会議に出席し、ダイオキシンの被害者に対する看護、
健康管理、リハビリなどの実施状況と、2年間（2003 - 2004）の活動をふりかえり、
今後2年間（2005 - 2006）さらにその後の、友好村10周年（2008）に向けての活動
計画を検討した。友好村の実態についてのチャン・ハン氏からの報告、及び、グエ
ン・トロン・ナン氏のダイオキシン被害についての講義を受け、ベトナム友好村に
住むダイオキシン被害者の実態を鑑み、国際的研究論文に言及しつつ、ここに私た
ちは宣言する。

- 1．米軍がベトナム戦争中に使用したダイオキシンは、30数年にわたって深刻な被害を及ぼした。生活環境とベトナム人民の健康・生命をおびやかしてきた。この事実はベトナム人民と、アメリカ人研究者を含む国際的な研究によって明らかにされてきている。
- 2．2004年2月25日宣言、特に、ベトナム戦争中に米軍にダイオキシンを供給した化学薬品会社に対する訴訟を支持する。
- 3．ベトナム社会主義共和国及びベトナムの社会機関は、困難に屈服せず、戦争の爪あとを克服し、ダイオキシン被害者の心身の傷を癒すために、ともに協力しあい活発に活動してきた。ここ数年間、国際機関、個人そして各国政府が、ベトナムに援助の手をさしのべてきてくれた。しかし、それだけでは、ベトナム戦争の被害者を救うことはできない。
- 4．ハノイ、ストックホルム、コネチカットで開催された国際会議を支持し、また、2004年インドのムンバイで開かれた「世界社会フォーラム」において、ダイオキシン被害が再確認され、研究者がこの問題の解決に向けて協力を続けることを確認できたことを歓迎する。

私たちは、全員一致で訴える：

- 1．アメリカ合衆国政府は責任とモラルをもって、即、ベトナム戦争の被害者、特にダイオキシンの被害者の救済に貢献すべきである。

2．各国政府、非政府機関、平和と正義を愛するすべての国の人々、そしてアメリカに限らず世界中の退職軍人は、ダイオキシン被害への憂慮を表明し、被害者への具体的な援助をもって、ベトナム人民と団結する意志を示すべきである。

ハノイ、2004年10月30日
各国委員会代表の署名（省略）

国際委員会総会の終了後、ハノイのホーチミン廟に隣接する大統領宮殿に各国代表は招待され、引き続き、化学毒薬ダイオキシン枯葉剤被災者への国際的な支援を要請された。



写真2 大統領宮殿前の写真、中央がホア副主席

6．ベトナム友好村への「パソコン教室」贈呈式 2005年8月15日

2001年新英研ツアー以来毎年ベトナムを訪ねて5年目、いまベトナムでは、化学毒薬ダイオキシン枯葉剤の犠牲児のニュースが連日報じられ、3世代にわたる惨状が明るみにされている。今年2005年のツアーの成田からの機内で、ベトナムでよく読まれているという新聞の一面にベトナム平和村、友好村の子どもたちの写真が大きく載っていて、支援を呼びかけていた。

ホーチミン市「戦争証跡博物館」の新設された広い展示場の中心テーマが「化学毒薬ダイオキシン枯葉剤の3世代目の犠牲児」たちの写真であった。ドイツで大きく報じられて、募金が大量に集まった、と「ベトナム友好村国際委員会」のローズマリー・マイゾー委員長から送られてきた犠牲児の別の写真が大きく飾られていた。

2005年8月15日、
2005年新英研・日越友
好協会東京都連ベトナム
ツアー参加の36人と
一緒に、ハノイ郊外の
「ベトナム友好村」で、
パソコン教室の施設設
備の贈呈式を行い、記
念撮影をした。友好村
の子どもたちもうれし
そうだった。昨年10月
私が「ベトナム友好村



写真3 犠牲児の写真（戦争証跡記念館）

新日本委員会代表」として初めて参加した「ベトナム友好村国際委員会第10
回総会」の時には、土台しかなかった場所に、パソコン教室を含む学校が建
てられて、パソコン10台と立派な横断幕が飾られて、私たちを待っていた。
真っ赤なベールを子供たちと一緒に引いて、みんなの笑顔いっぱいの感動的
な除幕式をした。

ベトナム友好村には、いま120人の子どもたちがいるが、いままでは刺繍と
縫製が、技術習得の課程だった。これからは、パソコンの技術を習得して、
現在パソコン使用がとても盛んなベトナムで、自立への準備に役立つことにな
る。また、パソコンというコミュニケーションの手段が、枯葉剤の犠牲の
子どもたちが世界と交流し、つながれるようになれば、と心から願わずに
はいられない。



写真4 2005年8月15日、贈呈式の記念写真

パソコン贈呈のことをマイゾー委員長に報告したところ、ドイツ、アメリカ、カナダの代表からお祝いとお礼のメールが届いた。

枯葉剤の犠牲者は、ベトナムだけでも300万人いるといわれ、子どもたちは80万人いるという。2004年1月ベトナム枯葉剤被災者の会が結成され、アメリカの製薬会社を告訴したが、今年3月理不尽にも、棄却された。アメリカ退役軍人の枯葉剤被災者には、補償金が出されているのにもかかわらず、アメリカ政府はベトナムに毒薬を大量に撒いた戦争責任を謝罪もせず、補償もしていない。今後、「ベトナム友好村」などへの支援と同時に、アメリカの戦争犯罪を糾弾し、ベトナム枯葉剤被災者のアメリカ製薬会社の告訴裁判の支援を国際的に進める必要がある。

（あはら しげみつ）